

「ヤマタノオロチの頭を探して」

< 雲南市木次町内のおろち伝説にまつわる歴史的資源に関する景観上の考察 >

武田隆司

1. はじめに

島根県の雲南地方には多くのヤマタノオロチに由来する歴史的地物や伝説が残されており、特に斐伊川の右岸部に多く、上流は横田町の鳥上山、下流は斐川町まで分布している。これまでヤマタノオロチは斐伊川をなぞらえたもの、朝鮮民族、北陸地方からの侵入者諸説が多くあり、またたたら製鉄との関連も伝えられている。この中でも旧木次町には大蛇の住処とされる場所、大蛇に酒を飲ませた場所、大蛇の首を埋めた場所等オロチ退治伝説にちなんだ地物が多く分布している。

これらは比較的人里から離れた場所、通常人が立ち入りにくい場所にありながら、古事記の時代から1500年もの間語り継がれ、あるいは祀られ現在まで守られてきている。地域の人々にとっては信仰、伝説としての意味だけではなく何か他にも守るべき重要な意味があったのではないか、このような疑問がわく。残された歴史的地物の分布、相互の位置関係、川や山との関係等何らかの重要な意味があるのではないか。このような地理学、景観の視点から仮説をたて考察を行っていく。

2. 旧木次町内のオロチ伝説にまつわる地物とその分布

オロチ伝説にまつわる地物	位置と伝えられる伝説
天ヶ淵	木次町南部の湯村。斐伊川の湾曲した瀬。 ヤマタノオロチが棲んでいたとされる場所
万歳山	天ヶ淵右岸に隣接する高さ256mの丘陵。足名椎と手名椎が姫とともに住んでいたといわれ、山腹には足名椎と手名椎を祭った神岩がある。
長者の福竹	天ヶ淵の北東2kmの約300mの土地。年毎に大蛇におそわれていた足名椎、手名椎が稲田姫をつれて山に登り、一時この地にのがれたとされる。
伴昇峰	足名椎、手名椎が大蛇から逃れて稲田姫をつれて登ったとされる山の峯。 万歳山の北西の峰405mあるいは長者の福竹の東の固屋畦425mと推測される。
印瀬の壺神	町中部の斐伊川右岸から東に1km上った丘陵部。標高200m。須佐之男命が大蛇退治の時に酒を入れた八つの壺の内の一つを祀っている。
八頭	木次町中央部の久野川の右岸の大字川上の谷部。天ヶ淵から山底が通じていて大蛇が行き来していたとされる。
御室山と釜石	木次町北西部の大東町境界部、標高260m。須佐之男命が八俣の大蛇を退治したときの八塩折の酒を造るため、御室を設けられ宿られた地とされている。この山の中腹に、その酒を醸したときに酒米を蒸したと云われる釜石が残っている。
八本杉	木次町北端の斐伊川右岸の平地。須佐之男命が八俣の大蛇を退治して、その八つの頭をこの地に埋め、その上に八本杉を植えたと伝えられている。

3 . 各地物周辺の景観（現地視察より）

現地視察は町南部の大蛇のすみかとされる「天ヶ淵」から「万歳山」「長者の福竹」「伴昇峰」「印瀬の壺神」「八頭」「御室山と釜石」「八本杉」と北に向かって進めた。

1) 天ヶ淵

直流してきた斐伊川が急に湾曲する瀬先であり、岩盤の下が大きく削り取られ、今でも常に水が渦巻いている。川の氾濫（大蛇の出現）の度に山手に逃れなければならなかったのがよくわかる。現在は314号が整備されているが、河岸部の地形は急峻で近世以前は陸路には適さない場所であったことが伺える。

2) 万歳山

かつては天ヶ淵から足名椎、手名椎の神岩までの参道があったが、度重なる斐伊川の氾濫による土砂崩れで消失したとされる。非常に急峻な丘陵地である。頂上からは斐伊川の災害多発地がよく見渡せると推測できる。また伝説によるとここから尾根伝いに405mの峰を超え、芦原の「長者の福竹」に逃れていったとされる。405mの峰からは斐伊川下流部から木次町北部まで見渡せると思われる。

万歳山の南には本郷の集落があり、盆地状の地形に比較的広い水田が広がっている。

3) 長者の福竹と伴昇峰

標高 325m の盆地状の地形に古くからの集落の芦原があり、福竹は集落の東側の丘陵地にある。ここからは集落全体を見渡すことができ、長者が住むにふさわしい場所である。東には町内でも最も高い標高 425m の「伴昇峰」が隣接する。この峰からは北は斐伊川、三刀屋川の合流部や斐川、大社方向の山々、南は仁多や吉田の山々が見渡せると思われる。戦国時代には山城も築かれていたというのうなづける。

長者の福竹から見た芦原の集落



長者の福竹から見た伴昇峰（標高 425m）



4) 印瀬の壺神

人里離れた小さな谷の小高い丘に位置する。谷沿いに小さく区画割りされた水田があり、森林もよく手入れをされており、良好な里山の景観を残している。神社の裏は現在樹林が茂っているが、なければ谷沿いの北西部に中の段付近の斐伊川を望めると思われる。また北東の谷からは遠くに「御室山」を確認できる。



遠くに御室山が見える

5) 御室山と釜石



御室山は標高 260m、釜石は 230m にある。現在は農道整備により掘り割りされているが、かつては同じ尾根状にあり、一体性のある地物であったと思われる。

御室山は出雲国風土記の中でもスサノオノミコトが御室を造らされたとされるように、周辺部への眺望が非常にきく場所である。標高は比較的低いが周辺部に高い山がないためである。東には大東町の太平山、高峯山、西には三刀屋町の峯寺山、北には斐

川の仏経山北西方向には遠く大社の弥山山も望むことができる。南方向にはオロチ神話の地物である「伴昇峰」、「万歳山」の東の峰、また遠くには岩伏山(456m)も望むことができる。



4．考察及び仮説（分布図参照）

現地視察のよる地形、景観の状況、地形図、歴史資料等より以下のことがわかる。

- ・ 天ヶ淵から、御室山まで斐伊川の右岸の丘陵地をほぼ南北線上付近に地物が分布している。
- ・ 各地物とも比較の見晴らしのよい山の峰に位置あるいは隣接しており、少なくとも1箇所以上の相互の位置確認ができる。
- ・ 御室山以外の地物は小規模ながらも近くに集落があり、古くから人々が住んでいたとされる所である。（地元の人々に語り続けられ守り続けられてきた）
- ・ 少なくとも伝説上は各地物が相互の関係を持ち、行き来できていたことになる。

以上のことから歴史的地物の存在の意味について以下の2つの仮説が考えられる。

1) 通信の中継ポイント

無線通信が普及する前の通信手段は早馬、飛脚等があったが、もっとも古い時代から行われてきた単純でしかも速い手段はのろしであったであろう。のろしを使うのであれば、相互に見えやすい場所であることが重要であり、そのために山の頂上部が選ばれる。また火をたく人間が必要であることから、近くに集落があることが必要となる。現在の地物の配置から想像すると、斐伊川の氾濫観測地区が天ヶ淵であり、万歳山から伴昇峰、御室山へ連絡し、斐伊川下流の地域や出雲大社方面へ災害予報等の情報伝達を行っていたことも考えられる。また逆に朝鮮半島や北陸地方からの侵略者の警報や出雲大社からの情報を雲南部に伝えていたのかもしれない。御室山は大東や三刀屋方面からの情報も扱う通信拠点であったかもしれない。視察時も比較的曇天にもかかわらずかなり遠くまで見通しがきいていた。木次地方のみならず、仁多、横田町のオロチに関する地物も含めて出雲と奥出雲、山陽地方との通信の中継ポイントとなっていたことも考えられる。

2) 交通経路のランドマーク

現在は斐伊川沿いが交通の幹線となっているが、治水技術が確立するまではどうであったであろう。斐伊川中、上流部のたたら製鉄の物資の運搬は船、急流部は馬を利用したとされるが、氾濫を繰り返す斐伊川の沿岸の陸路は交通上不利であり、むしろ山道を利用する方が有利であったのではないだろうか。近世の鉄、米の輸送経路として尾道街道（松江 - 大東 - 仁多 - 庄原 - 尾道）があるが、さらに古くは出雲 - 木次 - 仁多を經由する物資輸送の山岳ルートがあり、木次町内の地物もそのルート上にあったのではないかと推測される。各地物は見渡しがきくことから自分の現在位置を確認することができるし、近接の集落の人々も案内が容易である。万歳山、長者の福竹、印瀬の壺神などもその場所自体は低いが、隣接する峰からは見通しがきく。また言い伝えでは天ヶ淵から逃れて万歳山 長者の福竹 伴昇峰とされ、天ヶ淵からは険しいながらも八頭までオロチが行き来していたとされ、釜石、壺神などもオロチ退治のシチュエーションに関連しており、天ヶ淵から御室山までのルートを神話にまつわる地物のランドマークとともに伝えてきたのではないかと推測される。ただし山岳ルートという点では伴昇峰から南東部に見通せる尾崎の石壺神社（大蛇神社）の神岩があるとされる峰（319m）のルートの方が有利であろう。

以上2つの仮説をたてたが、地形、景観の視点からの可能性を前提としたものであり、さらに歴史的な検証を加える必要がある。また雲南部や山陽地方の地物との関連性も検討してみたい。

5．今後の課題

現地の視察を通じて感じたのは、このような歴史的資源が有効利用されていないのではないかと
いう点である。まずは各地物の関連づけることでオロチ伝説の魅力を向上することである。物語性のある
回遊ルート設定し、町のホームページ等でも各地物の紹介のみでなくその関連性や回遊ルートを十
分に紹介する必要がある。また案内サインが不足している。観光客が迷わないような適切なサイン誘
導を行う必要がある。（設置箇所の再検討、デザイン検討）

オロチ伝説にまつわる歴史的資源がこれほど分布している地域は珍しく、新たに雲南市となること
でさらに多くの資源が加わることになる。これらを新たな観光資源として再検証し、雲南市の誇れる
遺産として有効活用することが望まれる。

オロチ伝説にまつわる地物の分布図（旧木次町内）

..... 古代の道想定ルート

